トップ対談 46

組合員・地域とともに

「人」「自然」「地域」とのふれあい・きずなをたいせつに（上）

ゲスト／西上　聡（大阪府ＪＡ茨木市　代表理事組合長）

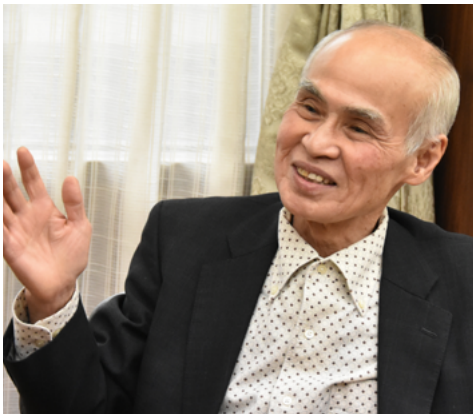
第46回ゲスト

大阪府ＪＡ茨木市　代表理事組合長
西上　聡

にしうえ・あきら
1956年生まれ。1980年茨木市農協春日支所に入組。2002年総務部財務課長、06年営農生活部長、07年監査室長、10年総務部長を経て11年参事に。15年代表理事専務、24年代表理事組合長に就任。趣味は南の島でのスキューバダイビング。

×

●インタビューとまとめ
三重大学　名誉教授
石田正昭



いしだ・まさあき
1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は農協論。元・日本協同組合学会会長。『家の光百年史』（家の光協会、2025年）を単独執筆したほか、『戦後農協史と『農業協同組合経営実務』』（全国共同出版、2025年）では刊行会代表を務めた。

ＪＡ茨木市（茨木市農業協同組合）

昭和50（1975）年に市内の10農協が、平成元（1989）年にもう1農協が合併して誕生した、地域密着型の「1市1ＪＡ」組織。半世紀にわたり、農業振興だけでなく、介護事業や清掃活動などのCI活動を通じて、地域社会のインフラとしての役割を担ってきた。

農林水産省経済局長賞などの多彩な受賞歴に裏打ちされた健全な経営基盤を強みに、近年は直売所「みしま館」の運営や最新の営農施設の整備を加速させる。組合員の利便性向上と、次世代へつなぐ安心で豊かな暮らしの環境づくりを両立させている。

●組織の概況

組合員数：7,268（正組合員：1,841、准組合員：5,427）
役員数：25（常勤・非常勤含む）
職員数：124（臨時職員含む）
設立：1975年3月
本店所在地：大阪府茨木市上穂積二丁目1番50号
出資金：11億6,100万円
貯金：1,867億2,500万円
貸出金：393億8,300万円
長期共済保有高：3,150億9,300万円
購買品取扱高：2億3,100万円
販売品取扱高：2億7,300万円

令和6（2024）年度実績

●地域と農業の概況

茨木市は、北部の山間地と南部の平野部からなる南北に長い地形で、温暖な瀬戸内海式気候に恵まれている。この変化に富んだ地勢と肥沃な土壌を活かし、赤しそや大甘青とうなどの特産野菜、さらにはいちごなどの栽培が盛ん。大阪・京都という大消費地に隣接する強みを活かした「都市近郊農業」が展開されており、新鮮な農産物を供給する拠点となっている。

人・自然・地域とのふれあい・きずなを求めて（上）

ＪＲ新大阪駅から快速で9分、阪急大阪梅田駅から特急で17分。駅周辺にはマンションが建ち並ぶ茨木市であるが、水稲中心の都市農業を展開している。北部の中山間地には見事な棚田が広がっている。そうしたなかで「人・自然・地域とのふれあい・きずなを大切にします」を経営方針に掲げるＪＡ茨木市のありのままの姿を西上聡組合長に語ってもらった。

「100ダン」で特別賞を受賞！

石田：『家の光』100周年記念企画ダンスコンテスト、略して「100ダン」の公式ダンス部門で特別賞を受賞されました。おめでとうございます。

西上：ありがとうございます。

石田：結果発表のあった「全国家の光大会福岡大会」に行っていましたので、翌週お伺いするＪＡ茨木市が受賞したことをたいへんうれしく思いました。どんな企画かは広報誌『プリマベーラ』（イタリア語で「春」）の掲載記事を見て分かっていましたので期待していました。

西上：撮影したのは令和7（2025）年10月15日。「ダムパークいばきた」で女性会とＪＡ役職員がいっしょにダンスを踊りました。わたしも寺本尚司専務理事も踊りましたし、マスコットキャラクターの『じゃい丸』君も踊りました。

昨年はＪＡ茨木市も同女性会も創立50周年を迎えていましたので、女性会と相談して「ＪＡ茨木市＆ＪＡ茨木市女性会『50周年記念』チーム」として企画し、応募しました。『家の光』が100周年ならば、わたしどもは50周年、タイミングが合いました。

ダンスを踊った場所は安威川（あいがわ）ダムの堤体の上。バックに水を貯めたダムとつり橋が見えます。このつり橋は全長420m、歩行者用つり橋としては日本一の長さを誇っていますが、これもタイミングよく同年3月17日にオープンしました。

石田：ドローンを飛ばしての撮影だったので、お金もずいぶんかかったのではないでしょうか。

西上：ＪＡ茨木市としても50周年の記念事業年度でしたから、いろいろな形でドローンを飛ばし店舗や事業所を撮影していましたので、ご

『家の光』創刊100周年記念企画ダンスコンテストの公式ダンス部門に応募。約800の作品から特別賞に選ばれた

く自然にドローンを飛ばそうではないかという話になりました。

ドローン事業者を正式に募集すると、かなり高くなりますが、そんな経緯もあって市内の事業者に安く引き受けてもらえました。

石田：それはよかった。でもダムの堤体の上でのダンスとか撮影とかは大阪府の許可が必要だったのではないですか。

西上：その点については企画時点から心配していたのですが、大阪府にご協力いただいて無事クリアとなりました。

このほか、50周年記念イベントとしては大阪・関西万博の開会式があった4月12日に組合員の皆さまにご参加いただいてダムパークいばきたで「ふれあいウォーク」を行いました。茨木市観光協会のボランティアガイドさんにも来ていただいて、ロックフィルダム（ダム堤体の巨岩は地元産の花崗岩を使用、花崗岩は旧村「石河村」産）やつり橋の説明を受けたのち、ダムの下のところで鷹匠による放鷹ショーを見学しました。

石田：鷹匠？

西上：茨木市は戦国時代から“鷹狩りの優れた地”として知られていて、信長や秀吉、家康もこの地で鷹狩りをしたそうです。

茨木市は、秀吉が中国大返し（備中大返し）を行った西国街道（現在の国道171号）が東西に貫通し、北摂と京を結ぶ交通の要衝となっています。営農経済センター（茨木市西福井三丁目）はその道路のすぐそばにあります。

1市1ＪＡの強みを活かして

石田：ＪＡ茨木市は1市1ＪＡとなっています。ＪＡ運営上、何かと都合がよいかと思います。先ほど営農経済センターへ行ったとき、小・中学校の給食用にお米を供給しているとお聞きしました。ただ、お米が足りないんだともおっしゃっていました。

西上：農業振興と食育の両方の観点から、お米を小・中学校に供給しています。ですがご指摘のようにお米が圧倒的に足りない状況です。

もともと大阪の北摂地域というのは水田農業を主体としていますが、小規模の水稲農家が多く、平均で30アール程度となっています。そうしたなかで米価が高騰していったものですから、縁故米が増えてしまいＪＡへの出荷量が大きく減りました。例年と比べると7割くらいの集荷となりました。

石田：その事情はよく分かります。市の予算は前もって決まっていますから、現に市価が上がっているからといって、契約価格を改定するのはそんな簡単なことではないと思います。

西上：そのとおりです。

石田：もう1つ、興味深かったことは、市との連携協定のなかで「空き家対策」

という項目があったことです。茨木市のような立地に優れているところでも「空き家」があるというのは驚きでした。

西上：ご承知のように、ＪＲや阪急の駅に近いところは都市化されていますが、北部に行くほど中山間地、山間地が広がり、いちばん高いところで標高680mに達します。その向こう側は大阪府豊能町と京都府亀岡市です。

茨木市長谷地区の棚田

その中山間地では見事な棚田が広がり、農村景観も素晴らしいのですが、高齢化のために空き家が増えています。それを農業振興上活用したいという理由と、防犯上好ましくないという理由から、空き家対策が打ち出されました。

市のほうから「空き家バンク」をつくって連携しませんか、ＪＡは売るほう、貸すほうという立場で、市は買うほう、借りるほうという立場で、両者がマッチングしてはどうかという提案でした。

従来、わたしどもは提携する不動産業者を通じて空き家をあっ旋していたのですが、農地付き住宅を求める新規就農者も少なくないことから、この話が進んでいきました。市が運営する農業塾に「あぐりば」というのがあって、比較的若くて、まったくの素人さんを対象に就農支援を行っています。その修了生たちが就農の場、居住の場を求めていることから、この話が具体化しました。

修了生はこれまでに８人、これからも年に８人から10人程度は出るだろうと言ってます。市と共催の農業祭でも「あぐりば」専用のテントが設けられており、ＪＡ直売所「みしま館」にも出荷いただいております。

石田：ＪＡも農業者育成のために「営農塾」と「若葉塾」を開講しています。それと市の「あぐりば」とはどう違うのですか。

西上：わたしどもの塾は定年帰農者等を対象としたものです。現にサラリーマンであって、農家後継者として位置づけられるような方を対象に、技術や経営を学

んでもらっています。営農塾はある程度年齢の高い方を対象とし、令和6(2024)年度に24期生の8名が修了し、修了者の総数は216名となりました。

一方、若葉塾は営農塾には参加がむずかしい方、年齢的には40歳前後で、お勤めの関係上、土曜日限定で参加できるような方を対象としています。若葉塾はサポーター育成というか、初心者入門という位置づけになります。

駅近で立地がよく、スーパーなどが立ち並ぶ激戦区だ

▌たいせつにしたい「地域とのふれあい・きずな」

石田：先ほどＪＡ直売所「みしま館」に行ってきました。ちょっと駐車スペースが狭いかなという印象を持ちました。

西上：そうですね。もともとは金融店舗「三島支所」でしたが、それを平成20(2008)年に直売所に改装したもので、駅近ということもあり、来店客用の駐車場はありません。本当は欲しいのですが。

阪急総持寺駅から西に200m、周辺にマンションが建ち並んでいるところです。平成30(2018)年にはＪＲ総持寺駅も開業し、場所的には最高の立地となっています。

石田：店長の向剛宏さんからお聞きしましたが、１年間を通してみると出荷品は不足気味であると言っておられました。

その一方で、出荷品のなかからＪＡが買い取って4つのインショップ(イオン2店舗、ダイエー1店舗、イズミヤ1店舗)に商品を搬入することで、季節的に供給過剰となる品目でもできるだけ売れ残りをなくすよう努力しているとのことでした。

西上：いずれのインショップも「みしま館」からそう遠くない距離にあります。出荷品の数量調整を迅速に行えるのは大きなメリットだと考えています。

石田：数量的にも、品目的にも、出荷品が足りないという事情は都市農業の1つの宿命かもしれません。市の「あぐりば」やＪＡ「営農塾」の修了生たちにもっと頑張ってもらいたいですね。

西上：そのとおりです。出荷者の組織として「ＪＡ茨木市農産物直売所『みしま館新鮮クラブ』」(構成員215名)がありますが、苗の供給や的確な情報提供に努めて構成員を拡充する必要があります。元ＪＡ職員が「あぐりば」の講師を務めていて、修了生たちとの関係性を深めることは不可能ではありません。担い手の

育成に手をこまねいているわけにはいきません。

石田：「みしま館」にも「あぐりば」の修了生たちが出荷していました。彼らをこれまで以上に戦力化することが重要だと思います。

ところで「みしま館新鮮クラブ」とは別に「ＪＡ茨木市朝市連携協議会」（構成員23名）があります。これはどういう組織でしょうか。

西上：昭和50（1975）年の農協合併時に全地区（旧農協の11地区）というわけではありませんが、8、9地区に朝市がありました。その横のつながりをつくるために「朝市連携協議会」を設けました。連携しながら共に発展していこうという趣旨から生まれたものです。

そのうち現在も活動を続けているのは中央支店管内の春日地区にある「郡（こおり）コミセン朝市」、北支店管内の清渓（きよたに）地区にある「泉原地域活性会」、同じく北支店管内の見山地区にある「銭原青空市」の3組織です。

基本は週1回、端境期は2週に1回程度の開催ですが、地産地消の活動をコミュニティベースで展開しています。

もちろん「みしま館新鮮クラブ」と「朝市連携協議会」の両方に加入する農家さんも多いですし、これらの組織とは別に、個人的に庭先販売を行っている農家さんも結構おります。

基本的に消費地のなかの朝市・庭先販売ですから、売るのには困らないというのが実情です。

石田：「みしま館」にお伺いする前に、「みしま館」に出荷している庄田佐知さんの畑を見せてもらいました。周りを住宅に囲まれた市街化区域内農地ですが、地下水を使いながら結構広い畑（約200坪）を使ってほうれんそう、ねぎなどの軟弱野菜をご夫婦で育てていました。お二人の活き活きとした姿がとても印象的でした。

佐知さんちの畑

庄田佐知さんは32年前結婚し、その後義母の野菜づくりを手伝ってきた。現在は独り立ちをして野菜づくりを行っている。

ご主人の啓道（ひろみち）さんは昨年3月にＪＡ茨木市を退職し、それ以降佐知さんの野菜づくりを手伝っている。ほぼ1年を経過し、啓道さんも野菜づくりの面白さが分かってきたという。

お話を聞いて興味深いというか、なるほどと思ったことがある。

第1は、直売所「みしま館」では、はっさく、ねぎは義母の「庄田清子」

さんの名前で、だいこん、ほうれんそう、祝蕾（しゅくらい）は「庄田佐知」さんの名前で売り出していたことである。

これは直売所のお客さんたちが出荷者の「名前」を見て商品選びをしているためで、出荷者からすれば古くからの「ごひいきさん」を失うような名前の変更は避けたいことを表していると直感した。

第2は、ねぎは毎日200g単位で20～30袋出荷しているが、出荷とは別に周りのお宅に「おすそ分け」をしていることである。これは、周りを住宅に囲まれたところで農業を続けるには、住民たちとの良好な関係づくりが欠かせないことを示している。

第3は、すいかは「黒すいか」を栽培していることである。ふつうのすいかはカラスにねらわれるが、「黒すいか」であれば寄りつかないという。実際にやってみないと分からないことが多い都市農業の現実である。

庄田さん夫婦。もともとは啓道さんの母が出荷されていたが、少しずつ佐知さんも手伝ううちに作る面積が広がってきたという